

鳥羽博道著「ドトールコーヒー、勝つか死ぬかの創業期」日経文庫 2008年9月1日刊を読む

世の中に活力を与えつづけることこそ企業の使命 - どんな向かい風でもヨットは進む -

1. ここ数年、日本の企業の多くが縮み志向、内向き志向になってしまって、自分たちが生き残ることだけしか考えられなくなっている。だが、それは企業だけの問題ではない。悲しいかな、日本の社会全体が夢や安らぎや活力を持てなくなってしまった。
2. 世相がここまで暗くなってくると夢が持ちにくくなるのもたしかに事実だ。だが、こうしたときこそ、夢を抱いて明日を切り開いていこうという気概を強く持たなければならない。そもそもサービス業、喫茶業というものは常に世の中に夢を与えつづけ、活力をもたらす存在でなければならない。世の中に夢、安らぎ、活力を提供して、それでお金をいただいているのである。
3. だからこそ、どんなに苦しい時期であろうとも、お客様に夢を与えるために、そして、企業で働く社員に働きがいを与えるために、企業は常に成長を続けていかなければならない。「未曾有の不況だからしかたない」とか「減益は他社も同じだ」とか、経営者である以上、絶対に言い訳や弱音を口にすべきではない。「他社が赤字だろうとなんだろうと、自分たちだけは成長しつづけ、お客様に夢を与えていくんだ」という、強い意志、気概を持ちつづけたい。

P43 ~ 44

4. お客様の支持を得られないような企業は成長もしないし、利益を生み出すこともできない。そればかりではない。そのうちそこで働く人間までが暗くなって、ついには会社全体が幽霊屋敷というような状況になってしまって、どんどん悪循環に陥ってしまう。常に明るく活力の溢れた企業でなければ、個人個人の能力がいかに高くても、企業そのものが活力を失ってしまい、成長を失ったときにはその能力のある人間まで殺してしまうことになりかねない。だから、何がなんでも企業というのは成長し、利益を出しつづけ、常に夢を提供し、明るい状況をつくっていかなければならない。

P46

5. こうした厳しい競合状態の中で、いかにして新しいマーケットを開拓していけばいいのか。また、いかにして取引先を拡大していけばいいのか。それには一層の努力と知恵が必要になってくる。これは決して容易なことではない。ただ、忘れてならないのは、ヨットは向かい風でも前に走るということである。風を読み、何枚かの帆を巧みに調整することによってどんな向かい風の中でも前に進むことができるのだ。

ドトールコーヒーマの社歌に「川の流れの真ん中を行く」という文言がある。私は川の端で渦巻いている流れるような生き方だけはしたくない。川の真ん中をとうとうと流れつづけていこうと願っている。たしかに、それは難しいことではある。だが、私にとっては川の端を渦巻いて流れているほうがはるかに苦しいことなのである。それは私にとって敗残者であり敗北者であるからだ。

- 6．自分の存在を脅かす強敵が現われたら、いかに全勢力を注いでそれを退けるか。もし、全勢力を注がずに負けてしまったら、川の真ん中の流れを譲ることになって、相手が川の真ん中をとうとうと流れていくことになる。それを黙って見ているのは屈辱に他ならない。だから、常に全勢力を注いで戦っていかなければならない。ドトールコーヒーマの歴史というのは、まさにその繰り返しとすることができるだろう。 P48 ~ 49

[コメント]

大不況下における企業の社会的使命とは、「企業の成長」による「倒産防止」と「雇用の維持・拡大」であると確信する。ドトールの鳥羽社長の企業理念はとても参考になる。

- 2009年2月19日林明夫記 -